

P1-640 中高年女性の自律神経機能に関する研究

東京医歯大

秋吉美穂子, 加藤清子, 宮坂尚幸, 尾林 聡, 久保田俊郎

【目的】閉経以降、女性の心臓血管障害の発生頻度が増加することが知られている。虚血性心疾患は、動脈硬化に何らかの要因が付加されて発症すると考えられており、その一つとして自律神経機能の低下が注目されている。本研究では中高年女性における自律神経機能と動脈硬化及び生活の質(QOL)との関連を検討した。【方法】当院受診者で重篤な合併症がなく薬物療法を受けていない186名を対象とした。自律神経機能は安静時心電図RR間隔変動をパワースペクトル解析し、低周波成分(LF)と高周波成分(HF)の合計を総自律神経活動(TP)とし、HF/TPを副交感神経指数とした。生活の質に関してはQOLアンケート調査により、動脈硬化は脈波検査により評価した。【成績】総自律神経活動は 6.2 ± 0.3 (40—45歳), 5.2 ± 0.1 (55—60歳), 副交感神経指数はそれぞれ 0.59 ± 0.05 , 0.51 ± 0.04 , 血圧補正した脈波伝播速度はそれぞれ 7.0 ± 0.6 , 7.7 ± 0.3 であり、50歳以降急激に自律神経活動が低下し、動脈硬化が進行することが判明した。一方、精神的健康に対する意識に関するQOL指数はそれぞれ 28 ± 2 , 26 ± 2 と低下傾向であった。【結論】閉経以降進行する動脈硬化や自律神経機能の急激な低下は、虚血性心疾患のリスク増加につながり、中高年女性のQOLに影響することが考えられる。従って、自律神経機能の評価を含めた総合的健康管理が重要である。

P1-641 更年期外来患者の心理社会的要因の検討

昭和大学¹, 赤松レディスクリニック²木村武彦¹, 白土なほ子¹, 赤松達也², 長塚正晃¹, 岡井 崇¹

【目的】更年期外来受診者の症状に影響を与える心理社会的要因を検討するため、愁訴及び社会的背景を一般更年期女性と比較した。【方法】対象：40～55歳までの更年期一般女性(一般女性)78名(平均年齢50.1歳), 外来患者63名(52.7)。方法：無記名の質問表により更年期症状(7項目, 症状の強度を1—4点に分けた), 閉経状況, 更年期障害治療歴を調査した。これらを基に、外来患者63名の得点配置からほぼ3等分し、低得点群(低群)1—12点(23名), 中得点群(中群)3—15点(19), 高得点群(高群)16点以上(21)に分けた。一般女性も同じ配点で、低群37名, 中群22, 高群19に分けた。高群と低群で一般女性と外来患者の愁訴と社会的背景を比較した。比較項目：心身の状態の自覚, サポート, 夫との関係, 過去一年のライフイベント。【成績】1) 一般女性, 外来患者ともに、高群に「体調の悪さの自覚」が強く($p < 0.01$), 「寂しさや将来への不安」が大きく($p < 0.05$), 「助けを求める気持ち」が強かった(一般 $p = 0.06$, 患者 $p < 0.05$)。 「ライフイベント」の数も多かった。2) 外来患者は、高群に「家事や仕事の分担」が少なく($p < 0.05$), 「夫との関係」は良くない傾向にあった($p = 0.06$)。3) 一般女性は、低群が高群より多く、高群は「誰かが精神的に支えてくれること」が多かった($p < 0.05$)。【結論】更年期外来患者と一般女性で最も異なっていたのは、精神的な支えや、仕事の分担などの身体的な支えのサポートのあり方であった。このことより、更年期症状を強く訴えていても周囲の強いサポートがあれば外来受診しなくてもすむ可能性のあることが示唆された。

P1-642 最近10年間の更年期女性の意識・社会的背景の変化について

東京医歯大生殖機能協同学

鳥羽三佳代, 秋吉美穂子, 石橋智子, 尾林 聡, 久保田俊郎, 麻生武志

【目的】新潟県内の近隣地域において1996年と2006年に同一アンケート調査を行い、ここ10年間の更年期女性の意識や社会的背景の変化等について解析することで婦人科医と更年期女性との関わり方について検討した。【方法】新潟県内近隣地域の40歳～65歳の一般女性を対象とした無記名式同一内容アンケート調査を施行し検討した。【成績】回答者数はそれぞれ451名, 630名で、平均年齢は 52.2 ± 0.35 歳, 53.2 ± 0.28 歳, 初経の低年齢化と晩婚化がみられるものの子供の人数や閉経年齢に差は無かった。ここ10年で更年期における重要事項を、生活の質を高めることと考える傾向が強くなり、注意すべき疾患として挙げられたのは、1996年は骨粗鬆症・痴呆・不安障害の順が多かったが、2006年の調査では不安障害(80.0%)・骨粗鬆症(70.6%)・痴呆(38.1%)と変化していた。治療について1996年はカウンセリングのみ希望が16.1%であったが2006年には11.5%と有意に減少し、ホルモン剤の使用を希望する割合に変化は見られなかったものの、ホルモン剤以外の薬物投与を希望する割合が15%から23%へ有意差に増加した。また情報源としてはいずれの時期も65%とマスコミが最も多かった。【結論】ここ10年で更年期医療における婦人科医の役割は増大しているがマスコミの影響は依然大きいものである。更年期以降に注意すべき疾患として不安障害に対する関心が強くなっており、精神的な安定を求める傾向が強くなっており、治療に関しては、カウンセリングのみではなく、ホルモン療法以外の薬物治療を希望する人が増加していた。